



生の本質とは



おさし もんたろう

生の本質とは

人は誰しも死んだことはない。一度死んでみたいが、山登りや潮干狩りのように気軽に体験できるものでもないし、なにしろ死んだら終わりである。経験がないから興味がわくのだろうか。世の中の表現者達はあらゆる角度から死をとらえ、なんらかの形で訴える。死ぬこととは一体どういうことなのか。それを表現するのは、終わりのない旅路に身を投じるようなものだ。ただ一つだけ言えるのは、死を表現する事は、生の本質を見つめることにつながっているということだ。

村上春樹を読んだとき、私はその事をまざまざと感じた。彼の作品はなんだか洋風で、どことなくオシャレな雰囲気漂っている。そして非常にリズムカルで読みやすい全体の構成の中で、一貫して死の具現化という作業を繰り返しているのだ。私は趣味でジャズを聴く。このジャズという音楽は、16小節や32小節で構成されたテーマとなるメロディーがあつて、ジャズマン達はまずそのテーマに対する理解をしめす。その後、少しずつテーマへのアプローチを変え、最後は完全に別の世界を創り出す。村上氏のジャズ好きは有名な話であるが、恐らく彼自身も小説の中でジャズを奏でているのではないだろうか。

村上氏の死に対するアプローチは、わりとキレイな構成のものが多い。しかし、時に残酷でグロテスクな表現を突き付けてくる。ねじまき鳥クロニクルの第一部では、ノモンハンでの出来事が描かれているが、日本の軍人が拷問されるシーンは非常に緻密で臨場感たっぷり描かれ、とても映像になどできないほどの衝撃を与えている。ノモンハンでの出来事は、物語の本筋に直接影響を与えるものではない。しかしながら村上氏は、割とキャッチーな物語のなかにワンポイント的に挿入した、小説の中で最もグロテスクなその部分を、一番表現したかったのではないかと思う。

我々人類を含め、動物たちは皆太古の昔から生きるために闘い、敗れたものの血と肉を糧に生きてきた。もちろん日本人も例外ではない。鶏を食べるには首を絞めなきゃならなかったし、羽だってむしらなきゃならなかった。鶏の首を絞めるのは可哀想でいたたまれないが、それをしないとこっちが生きていけないのだ。今日我々は、スーパーに行くだけであらゆる食材が手に入る。だがそこで豚や牛の肉を手にしたとき、この肉の塊が昨日までずっと生きていたんだと。そんなふうに考える日本人はもはや皆無に等しい。経済が発達し、汚い物をかくしてキレイな社会生活を築いてきた我々だが、グロテスクなものが生の本質だとすれば、資本主義は間違っているのかもしれない。だとしたら資本主義社会が崩壊するのも納得できる。